

## イメージのもうひとつの〈内〉<sup>i</sup>

平井 靖史

### 導入

ベルクソンが、その主著のひとつ『物質と記憶』において、〈イメージ〉と呼ばれる独自の实在概念を提示したことはよく知られている。ベルクソンは、一方に認識から独立な客観的な「物質」や「事物」、他方にそれに対応する主観的な構成物としての「知覚」や「表象」というものを置く、伝統的な認識論的な二元論の構図そのものを批判して、かかる二元論的乖離を施される手前の实在を出発点においた。それが〈イメージ〉である。

したがってこの〈イメージ〉は、一方で、通常「物質」において理解されるような厳格な物理法則による相互決定も受け入れつつ、また他方で、「知覚」が有するような絵画的な生彩も備えた、いわば両性具有的な实在概念となっている。宇宙は〈知覚＝物質〉としてのイメージの総体として記述できるとされる。

本稿が着目するのは、このイメージの「内」および「外」をめぐる規定である。とりわけ、「私の身体」と呼ばれる特殊なイメージをめぐって、『物質と記憶』第一章のテキストがどのような「内外」概念の展開を見せているかをたどることで、イメージ概念に新たな光を当ててみたい。

### 1. 鏡映するイメージ

まずは、問題設定の下準備として、物質（存在）でもあり同時にそれ自体知

<sup>i</sup> ベルクソン『物質と記憶』からの引用は、以下のカドリージュ版によりページ数を示した。翻訳は岡部總夫訳（駿河台出版社）を利用したが、適宜訳を変更した箇所がある。  
*Matière et Mémoire* (1896), 3<sup>e</sup> edition, Quadrige, Presses Universitaires de France, 1990.

覚（認識）でもあるというイメージ概念の特異性を、必要な範囲で確認することから始めよう。

私の身体を取り巻く諸事物は、私の身体のわずかな変化にも敏感に追隨する知覚的展望のシステムを構成している。例えばまぶたを閉じるという動きは、知覚のあり方を全般的に変容してしまう。同時に他方で、これらの同じ事物群は、物理法則に従って互いに作用反作用し、物質宇宙という一つのシステムを構成してもいる。まぶたの変化は、こちらのシステムにおいては、局所的な極微の変化にすぎない。そして〈イメージ〉とは、これら二つのシステムの構成素を、数的に同一なものとして描く概念である。

知覚は、物質そのものと数的に異なる複写物のごときものではない。言い換えれば、物質そのものは、われわれによる知覚の彼岸にあるわけではない。われわれは、知覚において、物質そのものに到達している。このことを示す上で最も重要な論点となるのが、「同じイメージ群が、同時に、二つの異なるシステムに帰属しうる」（MM, 20）という点である。では、いかにして、一方のシステムにおいては知覚ないし表象と呼ばれ、他方のシステムにおいては物質ないし事物と呼ばれるのが、同じイメージであると言われうるのか。

まず確認すべきは、知覚も物質も、それぞれ一つの構成素単独でそう呼ばれるのではなく、ほかの構成素とどのような関係においてみられるか、すなわちどちらのシステム構成において描かれるかによって、区別されるにすぎない、という点である。

基盤にあるのは、作用と反作用によって緊密に組織化された〈物質〉のシステムである。そこではすべてのイメージが「それ自身に関連づけられ」（MM, 20）、そこには特権的な「中心はない」（MM, 22）。

しかし、すべてのイメージが、「ある特定のイメージ、すなわち私の身体の可能的作用に関連づけられる」（MM, 17）ならば、作用反作用連関の描かれ方はがらりと変わる。物質が、与えられた作用のすべてに対して、即座に必然的反作用を返していたのに対して、知覚主体としてのわれわれの身体は、及ぼされるすべての物理的作用に対して反応する訳ではないし、また一つの作用に

対してとりうる反作用の数と種類もまちまちであるからである。これが〈知覚〉のシステムである。

具体例を挙げてみよう。われわれの眼球は、単なる物質としては、あらゆる物理的作用に対して物理法則によって定められた諸々の反作用を返すものとして振る舞う。しかし同時に知覚器官としては、可視波長の電磁波に対してのみ、選択的な仕方では生理学的な反応を示すものとして振る舞う。この反作用の選択性が、知覚を知覚たらしめる条件なのである。というのも、あらゆる波長域の電磁波に無差別的に反応する物質は、それ故に盲目であり、逆に、われわれの視覚的知覚が豊かな色彩を備えているのは、むしろこうした圧倒的な縮減の効果であるから。

物質としてのイマージュは、そのすべての要素的部分において物理的な作用伝播の単なる「経路」(MM, 33) にすぎない。その限りで、そこに知覚はない。しかし、こうして連絡される膨大な作用も、中心としてとられた、ある一つの選択的に反応する身体に関連づけられるならば、当の身体の反作用の可能性に応じない作用は捨象されるがゆえに、応じる作用のみが相対的に強調されることになる。そこに生まれるのが知覚であるなら、知覚対象は、ちょうど知覚身体のある方(どのような反作用をなし得るか)を鏡のように映し出す形になる。この意味で、知覚は〈鏡映〉である<sup>ii</sup>。テキストを引用しておこう。

私の身体を取り巻く諸対象は、私の身体がそれらに対してなしうる可能的作用を反射している *réfléchir* (MM, 15-16)。

私の知覚は、イマージュの総体のうちに、私の身体の潜在的あるいは可能的諸作用を、影 *ombre* や反射 *reflet* のような仕方では、描き出している (MM, 16)。

<sup>ii</sup> 鏡映が物理的因果的プロセスではないという点は注意されるべきだろう。石井が適切にも指摘するように、これは「見かけ上の反射」(MM, 43) であり、物理的には何も送り返されているわけではない。鏡映はシステム化の効果として理解されるべきである。Cf. 石井敏夫、『バルクソンの記憶力理論』、理想社(2001)、p. 77。

物質と知覚の見かけ上の差異は、反作用の選択性と、それによる部分の相対的な強調に帰着する。反作用の選択性が、単なる物質の中から知覚が浮かび上がってくる条件であるなら、われわれはいわば圧倒的に膨大な所与の作用に対して、不感であるが故に知覚する、と言えよう。知覚は、ほとんどを見ないことによつて、見ることに成功するのである。

このことは裏を返せば、物理的な作用反作用の連関の全体としての物質的宇宙が与えられるならば、知覚を作り上げる質料は、すでにそこに含まれている、ということである。知覚は、精神によつてその都度新たに生産されるような、何か積極的な心理的構成物ではない。すなわち、質料的に見て、知覚と物質の関係は部分と全体の関係に過ぎず、両者の間に本性の差異はない（物質においては、全体は部分の総和以上のものを持たない）。言うなら、知覚は、物質でできているのである。

ここには、積極的なもの、イマージュに付加されるもの、新しいものは何もない。諸対象がただ自らの実在的作用のいくばくかを放棄するだけで、潜在的作用を、つまるところ、生体がこれら諸対象に対してなしうる可能な影響を、描き出すのである（MM, 35）。

さて、こうした〈知覚〉の規定が、常識的な理解におけるそれとは異なり、いわばすっかり脱心理化されている点は、注目に値する。というのも、ひとたび知覚が〈鏡映〉構造によつて心理的なニュアンスを脱色された仕方で定義されると、逆にその限りで物質の知覚というものを正当に語ることができるからである。現に、物質がすべての作用に対して反作用するという事柄も、個々の作用に対する選択的な反作用の総体として記述されうるわけで、その限り、物質一般も知覚すると言えるわけである。ただし、鏡映といっても全面的であるがゆえに相対的な強調を持たない、いわば「濁った」（MM, 36）鏡映であり、知覚といっても特定の偏向性を持たないがゆえに「中和された」（MM, 33）知覚であり、部分的で偏向的な知覚を切り出すことのできる素地を提供する限り

において「潜在的」(MM, 36) 知覚であるが<sup>iii</sup>。

こうして、イマージュ概念は、この〈鏡映〉の構造を共通の本質として取り出すことによって、物質と知覚の本性上の同一性を担保していると考えられるのである。

## 2. イマージュの内と外

イマージュを特徴づける鏡映の構造を確認したところで、本稿のテーマであるイマージュの内外の問題に入っていきたい。

『物質と記憶』第一章の冒頭で、ベルクソンはイマージュ概念を簡単な仕方導入するや否や、即座に「私の身体」という「特権的なイマージュ」を導入している。本稿の主要な舞台となるのはこのテキストである。まずは、引用しておこう。

しかしながら、私がたんに知覚 perceptions によって外から du dehors 知るのみではなく、アフェクション affections によって内から du dedans も知るという点で、ほかのすべてのイマージュから際立ったイマージュがひとつある。それは、私の身体である (MM, 11)。

「私の身体」の特権性は、「知覚」とは異なる認識様態である「アフェクション」によって、「内から」認識される点によって規定されている<sup>iv</sup>。冒頭部分であるため、〈知覚〉や〈アフェクション〉をめぐる展開される理論は、まだ隠

<sup>iii</sup> さらに、物質のシステムにおいては透明な鏡映が相互再帰的に成立するから、物質は「それ自体として存在する」(MM, 158) 知覚であるとさえ言える。この意味で、物質であるとは、ある種の自己知を持つということに等しい。われわれの身体が切り出してくる知覚は、この完全かつ透徹した自己知の一部にすぎない。

<sup>iv</sup> 逆に、「私の身体」以外のイマージュは、アフェクションによって内から認識されることはない、という含意を有していることになるが、それは物質が持続を持たないからではなく、われわれが事実上自らのアフェクションから身を切り離すことができないからである。言い換えれば、権利上は、「物質の可感的性質も、外からではなく内から、それ自体において認識されることになるだろう」(MM, 72)。

されているから、初めての読者はこうした概念について漠然とした理解しか持つことはできない。

そこで、身体をめぐるこの文章は、私の身体の「定義」を与えるものなのか、それとも私の身体を「記述」するものなのか、と問うてみよう。後者であるなら、「私の身体」が何であるか、どのような輪郭を持つものであるかは、何らかの（テキスト外的な）常識的な理解に基づいて前提とされざるを得ない。そして、「外」および「内」は、この身体の輪郭の外や内を指すことになる。すなわち、身体の内と外という境界区分を所与のもののみなした上で、この区分に基づいて、身体の外に適用されるのが知覚、内に適用されるのがアフェクションであると読むことになるだろう。

しかし、前者であるなら、私の身体は、これからその輪郭が定義されるべき被定義項となるわけだから、ここに現れる「外」や「内」を、規定済みの領域として前提することはできない。とすればこの場合、逆に、知覚とアフェクションという二種類の認識様態の理論的な区別に基づいて、そこから身体の内と外が、すなわち身体の境界が規定されていると読むことになるだろう。

はじめに述べておけば、われわれはテキストが、この二通りの読み方について排他的な選択を迫るものであると主張したいわけではない。むしろ、「知覚」や「アフェクション」について、『物質と記憶』第一章が後に展開することになるさまざまな議論によって照らし返されることで、いわば必然的に二重の仕方で見られるような構造になっていると考えられる。さらに、二つの読み方の相互関係を明らかにすることではじめて、身体というイマージュについて「内・外」の観念そのものが哲学的な再吟味の対象となりうる。

### 3. 知覚の外在性

当該テキストを、所与の身体理解を前提とした、単なる「記述」と読むだけでは不十分であると感じられる理由は、いくつか見出される<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> 例えばウォルムスは、問題のテキストにおける「内」をもっぱら外延的な意味においてのみ解釈している。Cf. Worms, Frédéric, *Introduction à Matière et Mémoire de Bergson*,

この読み方では、身体の内外を規定する境界として想定されるのは、身体を覆う皮膚表面であるだろう。すると、知覚とはその外側を、アフェクションとはその内側を対象領域とするものとして理解されることになる。だが、話はそう単純ではない。ここで「内・外」の観念は、認識の対象領域ではなく、むしろ認識の起点の差異を示すために用いられているからである。目的格で「その内（外）を」と語られているのではなく、副詞句で「内（外）から」認識すると語られているのである。実際、形式的に言っても、単に対象領域が異なるだけならば、必ずしも認識作用そのものの種類が異なる必要はないだろう。だがこれに対して、ベルクソンは、〈知覚〉と〈アフェクション〉を、はっきり本性を異にする二種の認識作用として捉えている。

そればかりではない。テキストは、知覚によってではなくアフェクションによって、と述べる代わりに、知覚によってのみならずアフェクションによってもまた、と述べている。しかし、ここで「内外」の観念が、認識の対象ではなく、認識の起点を指していることを踏まえれば、「私の身体」が、「知覚によって外から」認識されるということは決して自明ではない。なぜなら、この場合、「私の身体」を知覚するその認識起点とは、当の「私の身体」に他ならないからである。ここで「外」を、私の身体の輪郭の外という意味に解する限り、「私の身体」が、「外から」知覚することができるのは、むしろ私の身体を取り巻く、イメージ一般ではないか。逆に、「私の身体」が「外から」知覚できない唯一のイメージこそ、「私の身体」ではないか。

ここで問いを反転して、こう問うてみることにしよう。現に、われわれは、「私の身体」が、内から感覚されるだけではなく、外から知覚されるもするということを、事実上難なく理解している。ならば、ほかならぬ「私の身体」を、「外から」知覚するということを理解しているとき、その認識の起点として、どのようなものをわれわれは考えているのか。また同時に、その際「外」は、どのように理解されているのか。

ここで再び、ベルクソンの純粹知覚理論を参照してみよう。

ベルクソンによれば、〈知覚〉とは、事物がそれ自体として何であるかをわれわれに告げ知らせるものではなく、われわれ自身の身体が、それら事物からの作用に対してとりうる可能的反作用を描き出すものであった。ひとつの作用に対して取りうる反作用が増えるだけ、知覚がより豊かに多重化される。たとえば、一本のペンに対して、それを手にとって何か文字を書くという反作用しか持たない場合には、ペンは「書く道具」として知覚されるにとどまるだろうが、私がペンを用いて何か手品をすることができれば、ペンの知覚はさらに豊かな生彩を帯びて私の眼前に現れるだろう。

さらに、私の身体による働きかけが及ぶ困難さの度合いに応じて、知覚対象は遠近さまざまに配列される（MM, 15; 57; 63）。このような〈鏡映〉構造によって定義される知覚が、中心—周縁の展望構造を持つことは明らかである。そしてその限り、この知覚的展望のシステムの中心におかれる、〈鏡映〉の起点としての「私の身体」が理念的に抽象化され、極小化されるのもまた自然である。

このことが、際立った仕方で明らかになるのが、まさに私の身体を知覚対象として考える場合である。私が私の身体を知覚する。知覚が可能的反作用の鏡映である限り、原理的にはペンを対象とする場合と何も変わらない。私の身体が、私の身体、たとえば腕に対してなしうる（たとえば握る、洗うなどの）反作用によって、私の身体の描かれ方は決定される。私の身体が「知覚によって外から」認識される、とは、この事態をさしているはずである。しかしこのとき、可能的反作用のセットとして定義される知覚の起点（鏡映の中心）としての私の身体は、知覚対象となっている私の身体が定位しているのと同空間上に、その輪郭の外部に、果たして存在しているだろうか。答えは否だろう。

とすれば、「私の身体」が「私の身体」を「知覚によって外から」認識する、と語られるときの「外」とは、単に素朴に想定されるような、「私の身体」の外延的な輪郭の「外」とは異なる意味を持ちうる事が分かる。そして、この第二の意味の「外在性」は、知覚という認識様態それ自体に固有な特質として理解されうる。

こういうことである。知覚が、中心となるイマージュの可能的反作用の鏡映

である以上、その限りで、中心のイマージュと周囲のイマージュは相互外在的な関係におかれる。鏡映が、中心の属性を周縁へと描き出す点に存する以上、周縁が中心に対して外在化されるのは不可避的だからである。知覚は、その構造的必然性からして、どこまでも知覚対象を外在化していく。その極限には、自らの身体そのものをも外在的なものとするような、理念的な知覚の起点が想定されることになるだろう。もちろん中心イマージュは、知覚の内実を構成するさまざまな可能的反作用を担うものであるから、現実には、特定の空間的広がりを持つ有機的身体である必要がある。しかし、与えられた状況に対する可能的反作用のセットが定義され同定されている限りにおいては、鏡映構造を実現する中心イマージュが空間的広がりを持つか否か、言い換えれば「内部」を持つかどうかは無視できるのである。そして現に純粹知覚理論は、この点を捨象して、私の身体を「数学的な点」とみなす限りで、権利上の知覚を語るものであった (MM, 59)。

#### 4. 鏡映 v. s. 投射

「反射としての知覚」の理論が、究極的には、数学的点到まで理念化された知覚主体を想定するというこの論点は、ベルクソンによる「投射」理論批判と照らし合わせて検討しておく必要があるだろう。

ベルクソンは、『物質と記憶』第一章において、非外延的な感覚的性質を空間へと投射することで知覚世界が得られるとする「投射」理論を執拗に批判しているが、その批判の矛先は、この理論が内外についての混乱した考えに基づく点に向けられている。

外的世界に対する私の信念は、私が非外延的な諸感覚を私の外に投射することに起因するわけではないし、起因することはできない。こうした諸感覚が、どうして外延を獲得しえようか。また、私はどこから外在性の観念を引き出しえようか (MM, 45)。

批判は二つの層から構成されている。一つ目は、「非外延的な諸感覚」そのものを、外延的な空間世界という「外」に対する「内」としてたてることの妥当性に対する直接的な批判である。内外は、あくまでも「イメージ相互の関係に他ならない」(MM, 21)。ここでベルクソンが念頭においている内外は、言うまでもなく空間的包摂関係としてのそれである。「われわれが、イメージがわれわれの外部に存在すると述べる時、そのことで意味されているのは、イメージがわれわれの身体に対して外的であるということである」(MM, 58-59)。そしてこの意味では、「知覚は私の身体の外に、アフェクションは私の身体の内にある」(MM, 58)と記述されうる。言うまでもなくこの第一の層は、本稿第二節にあげたテキストの「記述」解釈に対応している。

批判の第二の、そしてより根底的な層は、こうした空間的内外の区別それ自体の生成の条件を問うという議論地平におかれている。なぜ、「非外延的な諸感覚」は「内」と呼ばれないのか。それは、この理論が「外」を「獲得」ないし「引き出す」ことができないからである。外の獲得は内の同定と連動している。とすれば、投射理論に対する批判は、単に「内」から「外」へと到達することができないということを指摘しているのではない。そのような所与の内外の関係が問題となっているのではなく、非外延的な精神から出発する限り、内外の境界そのものの発生という出来事を説明することができない点を指摘しているのである。

確かに、批判の第一の層のみを見るならば、われわれが主張するような内外の第二の意味の余地などないかのように思われるだろう。しかしながら、内外の観念を巡って、テキストのうちに二つの議論地平が存在するのであることに注意するならば、その疑念は払拭されるだろう。一つはひとたび内外の境界画定がなされた上で語られる、空間的包摂関係を問題とする地平。もう一つは、この空間的包摂関係それ自体の、生成の場面を問題とする議論地平である。

ベルクソンは純粹知覚理論の本質が、「非人格的な基盤がやはり存在して、そこでは知覚が知覚対象と合致すること」を示すことにあると表明しているが、その際、「この非人格的な基盤こそ外在性そのものである」(MM, 69)と述べている。この「外在性」が、「私の身体に対して外的」という第一の意味における

それでないことは明らかであろう。

## 5. 内外の発生：境界身体

鏡映としての知覚においては、常に身体の境界が確定済みであることが前提となっている。知覚が鏡映するのは、身体が事物に対して取りうる反作用であるが、身体にいかなる反作用がなしうるかは、どこまでを当の身体とみなすかに依存する。たとえば、片足を失った人物について、その身体を皮膚表面で境界付けるか、あるいは義足を着用した状態で、義足まで含めてひとつの身体とみなすかによって、その身体になしうることの総体は変わるし、したがってその鏡映としての知覚も変化するはずである。

イマージュの内外の境界、すなわち表面は、決して端的に自明のものではない。現に、内外の区別が、所与のものではなく、形成されるものであることを、ベルクソンははっきり指摘している。

幼児期を研究したことのある心理学者は、われわれの表象がはじめは非人格的なものであることをよく知っている。それがわれわれの身体を中心として採用し、われわれの表象になるのは、徐々に、そして帰納のおかげによってである。… (略) …経験が示すように、まずはじめにイマージュの総体が与えられてあることを認めるなら、私の身体が、いかにしてこの総体のうちで特権的な位置を占めるにいたるのかは、きわめて明瞭である。そしてまた、その際、内と外と概念がいかにして生まれるのかも、はっきりする。内外の概念は、私の身体とほかの諸物体とを区別することから始まるのである。(強調引用者、MM, 45-46)

ここでもまた、誤解をしてはならない。ベルクソンは、(第一義における)「外」からの限定によって(第一義における)「内」が成立することを述べているのではない。出発点におかれる知覚=物質としてのイマージュの「全体」を、(第一義における)「外」と呼ぶことはできない。「イマージュの総体については、そ

れがわれわれの内であるとも外であるとも言えない」(MM, 21) からである。しかし、この全体性からはじめるならば、内外の区別自体が、すなわち身体の境界自体が生成可能である。では、それは、なぜ、どのようにしてか。

私の知覚は、まず諸物体の総体のうちにあり、ついで次第に自らを限定して、私の身体を中心として採用する。そして知覚がそうするように導かれるのは、この身体が所有する、行動を遂行し、アフェクションを感得するという二重の能力の経験によって、要するに、…(略)…感覚-運動能力の経験によって、なのである(強調引用者、MM, 62-63)。

きわめて本質的な論点がここに現れている。ここでベルクソンが述べていることは、身体が中心として採用されるのに先行して、すなわち身体の境界が画定し、鏡映の構造(知覚)が現実に成立するのに先行して、感覚-運動能力の発動があるということ、さらに、後者が前者の条件になっている、ということである。

鏡映としての知覚が、可能的作用の非因果的な反映であったのに対して、アフェクションは、身体の「実在的(リアルな)作用」(MM, 58; 59)に随伴し、これを感得する働きである。そしてこの行動-アフェクションの二重の能力の発動を通じて、イメージの総体の内に、次第に、限定された、ひとつの身体が編成されてくる、とされる。これはどういうことだろうか。

たとえば、「私の身体が空間内を移動するにつれて、ほかのすべてのイメージは変動するが、反対に、私の身体は不変に留まる」(MM, 45)と語られるとき、私の身体の境界が、すなわちその内と外の区別が、運動的实践を通じて組織化されることが示されている。もちろん、ここでの「不変」は、同一の運動に参加する運動的諸要素同士の相対的な不変、言い換えれば諸作用の同調性・協和性として理解されるべきであろう。

物質的宇宙はそれ自体無数の作用連関によって織りなされている。そのうちの一定の運動的諸要素が、協働してひとつの行動へと連帯しているとき、この

運動的協和とでも言うべき連帯性に基づいて〈私の身体〉が組織化される<sup>vi</sup>。しかし、ただ作用が盲目的に発動しているのみならず、この作用に内在して、諸作用相互の協和・不協和を感得するアフェクションという認識が同時に発動しているのでなければ、こうした組織化も不可能であろう。とすれば、アフェクションの発動は、身体の動的な境界画定において、本質的な条件となっていることがわかる。アフェクションとは、何よりもまず、このような身体の境界生成の現場に立ち会う認識様態として描かれる。

ところで、直ちに付言しておかなければならないが、鏡映としての知覚は、常に画定された身体の境界が与えられてあることを条件としているが、それゆえに、与えられてあると仮定されさえすれば、説明可能である。したがってこの意味では、知覚は、アフェクションから切り離して、これに依存しないものとも考えることもできる。そして純粋知覚理論は、まさにこの可能性を追求した理論である。

例えば仮に、物質イマージュの内に、中心となるイマージュの輪郭を任意に切り出すならば、鏡映としての知覚は、その周囲に知覚の展望を描き出すだろう。ところが、現実の身体にとって明らかに、この境界画定は任意ではない。言い換えれば、〈私の身体〉は、単に仮定された中心ではない。ところが、知覚それ自体は、何が身体として選ばれるべきであるかについては何も説明しない。それを説明するのは、アフェクションなのである<sup>vii</sup>。

<sup>vi</sup> 身体の全体を画定する運動的協和を前提としてこそ、部分における不協和が有意味になる。ベルクソンが身体における「相対的不動」として「痛み」(MM, 56-57)に言及するとき、この点を取り違えてはならない。杉山氏がすでに指摘している通り、アフェクションは痛みに限定される訳ではない。Cf. 杉山直樹、「ベルクソンにおける生成と身体性」、『カルテシアーナ』No. 13, 大阪大学(1995), p. 43.この意味で、行動と(意識的)アフェクションの関係は、物質と(意識的)知覚の関係に対応している。行動においてアフェクションは中和されると言えるからである。

<sup>vii</sup> 陀安氏は、アフェクションによってこそ私の身体の運動的活動が認識されるのであるから、作用(アクション)とアフェクションが分離不能であることを論じている。Cf. 陀安広二、「ベルクソンにおける身体概念」、『メタフュシカ』No. 27, 大阪大学(1996), pp. 111-113. 陀安氏の議論は、アフェクションを空間的ではない意味での内在性に結びつけている点で大変興味深い。

## 6. アフェクションの内在性

上に触れたように、知覚とアフェクションとの対比は、可能的作用と実在的作用の対比として描かれるが、こうした様相概念にも細心の注意が必要である。確かに、ベルクソンの知覚理論は、彼自身が強調するように、知覚を純粹に思弁的な認識ではなく、身体の実践的関心に依存したものとして解明することをその最大の特徴とするものであった。しかし、知覚理論における作用はあくまでも可能性という様相によって限界付けられているということを忘れてはならない。身体イマージュが現に作動するまでもなく、刺激に対する器官の応答可能性さえ与えられるなら、それで描かれる知覚の分節は決まる。知覚が、実在的因果作用のプロセスのうちにはない非因果的なものであるのも、それがイマージュ相互の関連付けの効果にすぎないからである。

では、これに対して、アフェクションにおいて見いだされる、身体の境界を構成するような作用の実在性（リアリティ）とは、正確に言ってどのようなものであるのか。ここで参考にすべきは、物質的宇宙を満たす諸作用の実在性（リアリティ）との区別である。たとえば、作用のリアリティを、それが「単に可能であるにとどまらず現に働いている」というところに求めるならば、物質としてのイマージュとは、まさに絶えざる作用反作用の全体的連関のうちにおかれているのであるから、その意味で実在的（リアル）であると言えることになる。現にベルクソンは、物質と知覚を、実在的作用と可能的作用の概念によって対比させてもいる（cf. MM, 20-21）。

しかし明らかなことだが、物質のシステム全体によっては、決して（私の身体）が特権的なイマージュとして構成されることはない。とすれば、アフェクションにおける作用がリアルであると規定されるとき、このリアリティは、物質イマージュにおけるそれとは異なる意味、すなわち、ただ「単に可能であるにとどまらず現に働いている」という以上の意味を持つはずである。そして実際、ベルクソンが、物質における作用とは区別する形で、身体の「リアルな作

用 *action réelle*」(MM, 14)「リアルな影響 *influence réelle*」(MM, 15)を語るとき、この実在性は、この第一義とははっきり異なる意味で用いられている。

〔任意のイマージュにおいては〕時がくれば、必然的な作用が自ずから遂行される。しかし、私は、私の身体と呼ばれるイマージュの役割は、ほかのイマージュに対してリアルな影響を行使すること……であると想定しておいた (MM, 15)。

物質の作用は、確かに常に現に働いてはいるが、しかしその働き方は、それが現に起動する前から決まっている。物質の作用の実在性が、アフェクションのリアリティと異なるのはこの点である。アフェクションにおける作用は、知覚のように、単に生じうるというだけで十分であるような作用から区別されるのみならず、物質のように、たとえ現に生じているにしても、生じる前からすでに生じたに等しいような作用からも区別される。どちらの場合にも、作用は生じても生じなくてもよかったような仕方規定されるに過ぎないがゆえに、リアルとは呼ばれない。そこには、持続における作用の発動という一回性の出来事を真に支持する契機が欠けている。

ただ作動するだけではリアルとは呼べない。アフェクションのリアリティ、それは、現に生じつつある作用のただ中でしか見いだされない、作用そのものに内在する「予見不能性・新しさ」に存している。物質イマージュは、必然的  
反作用を常に即座に返さなければならないがゆえに、結果的に常に働いてはいるが、そこに新しさの入り余地はない。アフェクション—行動のリアリティは、単に作動しているという所与の事実に求められるのではなく、「予見されない反作用 *réactions imprévues*」(MM, 69/67)<sup>viii</sup>を生み出す創発的な性格によって、その意味を充実されていると考えられるのである。現に、アフェクション

<sup>viii</sup> ウォルムスもまた、アフェクションにおける実在性が必然的作用における実在性と異なる点を指摘している。しかし、われわれとは異なり、彼のポイントは、アフェクションが部分と全体の間に見られる「内在的距離」を想定しているという点にある。Cf. *Op. cit.*, p. 73.

を有する点でイメージ一般から識別されるこの私の身体は、はじめから、イメージの総体のうちに「何か新しいもの」をもたらすものとして描かれていたことを想起されたい。

アフェクティブな状態が達する行為は、運動から運動が導かれる場合のように、先行現象から厳密に導かれるようなものではない。であるから、この行為は、宇宙とその歴史に、何か新しいもの *quelque chose de nouveau* を紛れもなく追加するものである (MM, 12)。

現に作動してみることに、そしてその作動の内に臨在すること、そのことでしか得られないようなリアリティとは、その都度の個別的で具体的な作用の発動だけが有する予見不能性に存している。

これらのアフェクションが生じる諸条件を検討してみると、アフェクションは常に、私が外から受容する刺激と私がこれから遂行する運動との間に、あたかも事態の最終的な帰趨に不確定な影響を及ぼすべく、絡み込んでくるといことが分かる (MM, 11-12)。

知覚は、身体に何が可能であるかを描き出す。しかし、知覚が、身体が現に何をなすのかを条件づける訳ではない。もしそうであるなら、そこに新しさの余地はないだろう。むしろ逆である。われわれは、何が自分の身体であるか、自分の身体に何がなし得るのかを、実際に具体的な現実の中に身を投じることでしか知りえない。義足が残りの私の身体とうまく協働してくれるかどうか、歩いてみなければわからない。のみならず、歩いてみることでしか、歩けるようにはならないのである。義足が身体という境界の内にあるか外にあるかは、こうして予見不能なリアリティのただ中で決定される。可能性に基づく知覚世界が定義されるのは、ようやくこの境界付けをまって、なのである。

身体が現に作動することによって、身体の可能性の全体が、したがって知覚が再編成される。私の身体の可能的作用の方が、実在的作用によって条件づけ

られているのである。そして、この現実の作動に立ち会う認識がアフェクションである。作用の現実的発動に対して徹頭徹尾沈潜する認識のこの内在的な様態こそが、鏡映構造によって規定される知覚＝物質の外在性とは異なる、アフェクションに固有な本質である。

## 7. まとめ

イマージュについて内外が語られるとき、これをどの相においてとらえるかによって、二重に解釈が可能である。

まず、イマージュをもつばら鏡映の構造によってのみ理解する場合には、イマージュの内外の境界は所与のものとして考えられることになる。鏡映構造は、作用の可能性や必然性によって定義されるが故に、境界生成の場面を問題にすることができないからである。この場合、内外は、物質、あるいは知覚対象相互の間の空間的包摂関係（第一義における内と外）として理解される。

逆に、イマージュの内外を、その境界生成の相のもとから考察するなら、イマージュは知覚とアフェクションという二つの認識様態の関係において理解されることになる。アフェクションは、身体の現実的作動の現場に臨在しつつ、無数の作用連関の中から私の身体の境界を内在的に析出していく。アフェクションという認識の内在性はここに存している。これに対して、知覚が描く可能性は、アフェクションにおける境界生成によって結果的に得られた空間的包摂関係に依存している。つまり、内外の第一の意味自体が、アフェクションによって条件づけられているのである。この意味で、知覚という認識は、境界生成の現実的作動に対して外在的である。鏡映構造において不可避免的にイマージュが相互外在的關係におかれることは、そこでイマージュの境界が所与と見なされていることに起因していたから、結局のところ、知覚という認識様態の外在性は、この境界生成のリアリティに対する外在性に存していると言えるだろう。

私の身体は、その絶えざる現実の作動の中で、あらたな可能性を組織化しつつ、自らの境界を更新していく。アフェクションは、この生成の相を内在的に

たどる認識である。知覚は、こうして組織化された身体の可能性によって導かれる結果の相をその都度空間的に描き出す。アフェクションが生成しつつある境界のリアリティを内在的に認識し、知覚が、その都度獲得される可能性を鏡映によって外在化するなら、身体イマージュとは、まさにこの二つの様相の狭間で生起すると言えるだろう。

確かに結果の相だけに着目して、任意の時点における身体の外延的な内部と外部を語ることはできる。そして事実、そうした身体境界の内部にアフェクションを局所化することもできる。しかし境界の内部を語ることができるのは、当のアフェクションが作動そのものに内在しつつ、境界を生成しつつあるからであることを忘れてはならない。そして、内在性と外在性の観念を、こうした所与の空間的包摂関係から独立に、むしろそうした空間的關係それ自体を生成する局面において、アフェクションと知覚という二種の認識様態それ自体がそれぞれ帯びる固有の本質として理解できるならば、私の身体が「知覚によって外から」のみならず、「アフェクションによって内から」認識されると語る冒頭のテキストを、まさに身体の発生的定義を与えるものとして読むことも可能なのである<sup>ix</sup>。

(ひらい やすし／福岡大学)

---

<sup>ix</sup> 本稿は、2005年9月に京都大学で開催された国際シンポジウム「イメージと解釈」(京都大学COE「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」)の報告の一部をなす拙論(“Inside and Outside the Mirroring Image”)に、内容的にほぼ重なるものである。